

ロゴスとミュートス

——言語学から説話学へ——

末 松 壽

PRÉSENTATION

La distinction établie par Émile Benveniste entre *discours* et *récit historique* (avater de l'opposition *logos / mythos* des Anciens) a incité de nombreux critiques (linguistes, tel H. Weinrich, ou philosophes) à réfléchir sur les questions de l'énonciation en général et en particulier sur la modalité de la relation entre ces deux types d'énonciation. Les théoriciens de la littérature de leur côté en ont tiré parti afin de consolider les bases d'une science en construction. Il nous a paru cependant nécessaire de réexaminer la théorie du linguiste, notamment en ce qui concerne la légitimité de poser le discours indirect comme "troisième type d'énonciation" (ainsi qu'il l'a fait) et de nous demander s'il n'y avait pas lieu, à la place, de proposer un tout autre type : la *définition*. Il fallait, d'autre part, mettre en lumière une certaine mutation conceptuelle des termes-clefs (*récit, discours* précisément) de Benveniste aux poéticiens dont Barthes et en particulier G. Genette, changement de perspective qui a permis, depuis les années 1970, l'essor remarquable de la narratologie. Telles sont les tâches que nous nous proposons dans cet essai.

そこから明らかに、定義はきわめて自由であって決して反論され得ないことになる。というのは明白に指示したものに任意の名称をあたえることより以上に許されることは何もないのだから。ただ命名の自由を濫用して同じ名をふたつの異なるものに与えることのないように注意しなければならない。

(パスカル『幾何学精神について』)

思惟のいとなみに不変（普遍）の主題があるのかどうか私は知らない。ただ時として、たまたま読んだり書いたりして、そういえばこれは、あるいはこれに似たことはいつか知らされたことがあると不意に思いあたって、奇妙な喜ばしい印象にうたれることがある。それもかなり昔のことであってもう長いあいだ忘れていたことだったりすると、この印象はつよい。たとえば数年まえ筆者はソスユール以前のフランスの言語学思想をしらべていて、知性と言語の関係をめぐる十八世紀におこなわれた「自然的」語順と「制度的」語順、倒置に関する論争が、すでに括弧つきでいま表現したことでお気づきかもしれないが、古代ギリシアの哲学者たちにおけるピュシスとノモスの関係ないし対立をめぐる論争の再生であることに気づいた。それがとりわけポリスにおける人のあり方、人倫つまり善や法についていわゆる知者たちと愛知者たちのあいだで論議されたことをすぐには思い出さなかったのは、問題の所在が統辞法という限られた場面に移しかえられていたからである。『クラテュロス』を知らなかったわけではない。これとて言語における「自然」と「制度」のテーマを扱っている。けれどもそこでは物と名の結合のありかたが問われていて、語順は話題にならない。いやしかし十八世紀には単に言語だけがピュシス——ノモスの対概念で分節をみたのではない、と人はいうだろう。じっさい、ルソーの時代とは自然を措定してこれとの関係で全体として「文明」を考えた時代であったことに思いあたる。“civilisation”なる語が1757年に出現をみる事実は偶然ではない(1)。

このような「類比的」問題系とでもよべる主題のひとつをこの試論でとりあげるために、筆者はあえていにしえの言の葉でタイトルを提示する。

さて本稿でいう「歴史的言表行為」(énonciation historique)とは、言語学者エミル・バンヴェニスト(Émile Benveniste, 1902-1976)がいわば「談話的言表行為」との対比で提起した用語である。この種の行為の実現する「歴史的言表

(énoncé historique)——同義語としては「歴史」(histoire)や「歴史的説話」(récit historique)が、また場合によっては単に「説話」がある——はバンヴェニストにおいて、談話(discours)に対立する(*2)。我々は、言語学者の理論にとっては不可能な「歴史的言表(行為)者」(énonciateur historique)なる概念の導入が要請されなければなるまいと考えているが、それは後の問題として、さしあたっては、著者の論文にそくして、これらふたつを立てる理由、またどういう場面においてそれが定立されるのか、これら二項はどのような対立のありかたをもつのかを記述し、そしてこれらがどのようにして、場合によってはどのような留保のもとに、文学の理論にとって基礎的な概念を与え得るのかを考えた

い。

第一章 バンヴェニストの理論

フランス語がいわゆる「過去」については、単純過去と複合過去というふたつの時制をもつことは周知のとおり。この事実が「フランス語の動詞における時制関係」の出発点になる。この冗長性は時制システムにおける一種の「断層」をしめしはしないのか。

伝統的解釈

伝統文法は、と著者はいう、まずこれらふたつの時制を「同じ形の二つの変異体」として説明する。単純過去は書く時につかわれ、複合過去は話す時にえられる、という。第二にそれは、言語の通時的な変化つまり「推移の段階の指標」であって、「古い形」(il fit)が「より保守的な」書きことばに残っているのにたいして、これと競合し、ついにはこれにとってかわるべき「代理の形」(il a fait)がすでに話しことばを支配している、というのである(p. 238)。バンヴェニストは、これらふたつの解釈に立つ学者、その師であったメイエの「単純過去の消滅」(*3)なる論文を批判する。

「消滅」なる用語はもちろんふさわしくない。ひとつの形は、その機能がもはや必要でなくなるか、もしくはそれをべつの形がよりよくはたすのであれば消滅するものではない」(p. 243)。

このような歴史言語学的な見方——それは一種の進化論であるがゆえにまた予言的な性格をもつ——にたいして、構造主義者は、まずひとつの事実をあげて疑問を提出する。話しことばと書きことばとは、なぜこの「過去」という一点においてのみ分裂するというのか。なぜそれは他の「パラレル」な形にはおよばないのか。じっさい、これらのおなじ「過去」にぞくする単純形／複合形の関係（同一性と差異）のあり方は、たとえばおなじ「未来」にぞくする単純形／複合形——の関係とおなじではない。il fera と il aura fait にはいかなる共通性もなく、両者は絶対的にことなっている。類比的な差異は、バンヴェニストのいわゆるアオリスト単純形 il fit／アオリスト複合形 il eut fait にも見出される(*4)。そこでも書／話の「離婚」はあらわれない。

バンヴェニストにとっては、「おなじ語幹からとられたあらゆる動詞の形がおなじ活用表に…ぞくする」のではない(p. 238)。それはもっとみえにくい「もっと複雑な原理」によって組織されている。ではその原理とはいかなるものか。

バンヴェニストの解釈

彼は書いている。「フランス語動詞の諸時制は単一システムの構成者としてもちいられるのではなく、異なりかつ相補しあうふたつのシステムに配分される」(*5)。それぞれのシステムが時制の一部分しかふくまず、ふたつとも競合的にもちいられるのであって、いずれもが「各々の話者にとって使用可能」なのである。ところでこのことは「ふたつの異なる言表作用の面(plans)」をあきらかにする。つまり「歴史(histoire)のそれと談話(discours)のそれ」である。二つの言表面または言表領域の存在と識別、これがバンヴェニスト理論の中心的なテーゼとなる。

歴史的言表作用は、大別してふたつの性質ないし特徴をもつ。まずその機能、つぎにそこにおいて動詞カテゴリーのうける限定である。すなわち、

①歴史的言表作用は「今日では」書きことばにぞくする。それは「過去の事件の説話を特徴づける」(p. 239)。三つの用語 récit (説話)、événement (事件)、passé (過去の) はひとしく強調されねばならない、という。そして著者によれば、この「説話のうちには話者のいかなる介入もない。」(この命題の検討はいまはおく)。最後に一般言語学者は、「歴史的意図はたしかに言語の大きな機能のひとつを構成する」と指摘する。つまり、過去として特徴づけられる事件を語るのは、言語の重要な機能である。

②言表作用の歴史的な相がそれとしてみとめられるのは、それが時制および人称という動詞のふたつのカテゴリーに同時に制限をもたらす事実による。まず人称について彼は、「歴史的説話とはあらゆる「自叙伝的な」言語形式を排除する言表様態」(p. 239)であると定義する。歴史家は「私」(je=僕)「あなた」(tu=君)などということはない。「彼は、「私」—「あなた」という人称関係にまず存するところの談話の形式的機構をかりることはけっしてないからである」(*6)。指呼詞(déictique)、「ここ」(ici)「いま」(maintenant)も同様に排除される。「感覚的確實性」の弁証法にとって特権的なパラディグムを提供した hic et nunc は(*7)、言語学者においては談話状況の標である。談話の三人称においてはそれは「ここ」「いま」との相関性において「あそこ」(là)「その時」(alors)に転化する(ヘーゲルとの類似と差異)。ところが説話においてはこれらの形しか、それも「ここ」「いま」への参照を欠いたものとしてしか出現しない。それゆえ厳格に追求される歴史的説話においては三人称(バンヴェニストのいわゆる非・人称)(*8)の形しか認められないことになる。(この命題は後に検討する)。

他方、時制については、そこには基本的には三つがもちいられる。アオリスト(その複合形もはいる)、未完了つまり半過去(そして条件法もふくまれる)、それに大過去である。付随的に、バンヴェニストが前望時制(prospectif)とよぶ未来を代理する迂言形もここにくる。ひるがえって説話から排除されるのは現在・未来・複合過去の諸形態——談話の基本時制——であり、双方に共通するのは半過去および大過去である(p. 243)。現在形について著者は、「現在形は「定義の現在」——きわめて稀な——のような非時間的現在をべつにすれば、排除される」(p. 239)とする。つまり、非時間的現在は歴史的言表作用において使用され得るということになる。

しかし、議論はこの点についてはいささか不明瞭である。著者は「定義の現在」の容認をこれ以上は説明しない。これが談話においても同様に容認されるという誰でも知っている事実がここに難問をつきつけずにはおかないであろう。じっさい『三角形の内角の総和は二直角である』とか『水は100度で沸騰する』とかの言表は、非時間的な「現在」の形で、時制の照応の原則に拘束をうけることなく、談話にも説話にも介入し得る。この形は二種類の言表作用に共通にあらわれ得るとはいえ、コンテクストにおける他の時制の影響から自由であるという限りにおいて、半過去や大過去とは身分を異にすることをみとめなければなるまい。それは「過去の事件の説話」を記述しない。さりとて、そ

れは固有のいみで談話の言表にもぞくさない。非時間的であるがゆえに“hic et nunc”の限定をもたず、je-tu が構成する「談話の形式的機構」からものがれる。それゆえ、我々はラルス『言語学辞典』（*9）とともに、この種の言表を、言語学者のたてた二種類のそれとは別種の言表として措定する必要があるとかがえる。（著者自身はこれとは別のものをそれとしてたてる。これはまもなく話題となる）。いずれでもなく、いずれにも介入し得るからである。これは局限された射程しかもたない些細な事象とみえるかもしれないが、実際には理論上の重要性をもつとおもわれる。明示的であれ暗示的であれ、必然的に繫辞（copule）をともなう定義という言語の機能を否認するわけにはいかないからである（*10）。

以上の議論につづいて、動詞の「歴史的」骨組みをもっとよくあきらかにするために、著者は「無作為にえらんだ」（pris au hasard）という説話の見本を三つ引用している。

歴史的説話の定義

質のたかい文章とりわけその明晰さを理由に、バルトが手放しで賛嘆した（*11）バンヴェニストの記述には、ここに関しても言いおとしによる不分明さがあるかとおもわれる。他方の「談話」についてなら定義の手続きは完璧である。「談話はその最大の外延において解さねばならない」（p. 241）とのべたあと、彼はまずその内包をあたえる。すなわち、「話者と聞き手とを、かつ前者においてなんらかの仕方で後者に影響をあたえる意図を前提にしたあらゆる言表」である（p. 242）。外延はどうか？ 言語学者はこたえる。

「まず卑俗な会話からもっとも飾られた演説にいたるあらゆる性質とレベルの多様な口頭談話である。だがそれはまた口頭談話を再生したり、もしくはそれに言い回しや目的をかりた文書の総体である。すなわち、書簡、回想録、演劇、学術書」（p. 242）。

いまは列挙されているさまざまなタイプの文章表現の妥当性についてはとわらない（学術書については、かぎられた範囲での異論を提起した）。すくなくとも著者が「談話」でなにを意味しているか——名の定義——はわかる。

ところが「説話」についてはその外延がそれとして明確な規定をうけることはない。「説話」のうけた誤解のすくなくとも一半はこの省略に由来するよう

膨大な文学説話の多くはこの原則に厳密にはなじまない。想像的であるという本質からして、そのかたる事件も人物も創造的であり、ダンテのいわゆる「麗しき嘘」(bella menzogna)(*17)である以上、「過去の事件」「ある瞬間に到来した事実」「生起したこと」といった規定に違反することはあきらかである。著者の慎重ないいかえにも「あたかも」なる虚構の徴をつけなければなるまい。

さてそこで、これまで素描してきたバンヴェニストの見解を見本テキストについて確認する必要がある。(かぎられた紙面にこれらを復元することはできない)。

「誰もここでは話さない」

三つのテキスト(以下これを、A、B、Cとよぶ)はいずれも書きことばにぞくする「過去の」(テキストCは想像文学の例であるから転義でしかこれを語れない)事件の説話である。「歴史的意図」がそこに一貫して追求されていること、この意図が言語の機能のひとつであることもみとめよう。人称については、「僕」「君」は指呼詞とともに、ない。「そこ」ならばAの第13行に、また“y”の形でおなじく5行目にみえる(*18)。「その時」はA、第12行・B、第17行に。もちろん「三人称」単数・複数の動詞しかみえない。時制については、アオリスト、——その複合形(B、1、15行目)——、未完了過去、付随的に条件法(B、9、23行)、過去完了、そして前望時制(A、第16行)である。現在形は全体として排除されているといえる。二つの例をみるが、これについてはまもなくふれる。

著者は「使用される時制の種類も性質も」おなじ限定をうけている事実を、「歴史的説話がつづくかぎりこれがかわる理由はまったくない」とコメントする。そして書く。

「またそれが停止するいかなる理由もない。なぜならば、世界の過去の全体はアオリスト、未完了過去、過去完了という三重の時制関係にもとづいて構築されるひとつの連綿たる説話として想像することができるからである」(p. 241)。

「作者がその歴史家の主旨に忠実でありつづける」ことがその必要にして十分な条件である。したがって「事件の説話にとって外的なもの(談話、考察、比較)を放逐する」ということが。説話としての世界の過去というこの言い得

て妙なる文句は、我々の時代における説話学構築へのあゆみを挑発するに十分な「文化科学的な」(バルト) (*19) 射程をもつ命題であった。理論家たちは比肩すべきもしくはさらなる一般的な展望を説話の研究にひらくであろう。作家はなおもみごとなパラドクスを提示する。

「じつのところその時にはもはや語り手はいない。事件は歴史の地平にあらわれるにつれておこったままに定立される。誰もここでは話さない。事件がみずからを語るかのように」(p. 241)。

第三タイプの言表？

見本テキストにはしかしいくつかの例外があることを言語学者はみとめざるを得なかった。それは原則を再確認するのか、あるいは理論にとってのアポリアを構成するのか。著者による処理の仕方を検討しよう。

①テキストB, 1. 12-13。「ソロンは(…)悲しげにいうのだった。『大事業をおこなう時にみんなに好かれるのはむずかしい』と」。バンヴェニストはこの文章を「説話内への、時制の相関的な変更をとまなう談話の介入」(p. 240, n. 3)と註釈している。説話内での説話(者)による談話の直接話法での引用である。「時制の変更」とはここで説話文脈(disait)からみての謂である(est)。むろんこれはふたつの言表行為の区分にとっていかなる困難ももたらさない。これはそれぞれの純粋さをたもっているからである。しかし引用にはもうひとつの手法、間接話法がある。これが第二の例外である。

②B, 1. 17-21。「僭主になる『度胸がなかった』というので、人々は彼に侮辱とあざけりのことばをふんだんにあびせかけた。『たとえ一日たりともアテナイの支配者になれば、皮をはがれて革袋にかえられ一族は廃絶になるかもしれないことを』のぞまなかったというのである」。証言、したがって「談話」の利用——引用符の使用——でありながら、それは発言された時のままの人称をのこさず(二人称から三人称への転換を想像することも不可能ではない)、ことに時制の変更(談話の諸時制の大過去形および接続法半過去形へのおきかえ)をうけて、説話文脈に編入されている。この間接話法はさきの発言そのままの復元とちがって、バンヴェニストにとっては理論の補充をうながす性質のものだった。すなわち第三種の言表の設定である。彼はいう。

「歴史的言表作用と談話のそれとは、場合によっては合体して第三のタイ

プの言表行為となることがあることを括弧つきで指摘しよう。そこでは談話は事件のことばで報告されて歴史的の局面にうつしかえられる。普通「間接話法」とよばれているものがこれである」(p. 242)。

③C, 1. 4-5。「(若者は)鏡のまえにたって、フランスで趣味の掟がゆるしている以上にすこしばかり豪華な自分の服装をちらりとみた」(ルビ筆者)。言語学者はこれを脚注において「説話領域から逸脱する著者の考察」(p. 241, n. 1)と説明する。談話の介入である。これまた説話の内にくみこまれているとはいうものの、その現在時制という標識であきらかなように、談話の性格をそのままもっている。その限りでは第一の例外と比較すべきものである。書き手の考察の「引用」として理解することができる。

こうして体系にとって問題となるのは第二の事例のみであることがわかる。これを吟味しなければならない。著者はこの事例を第三タイプの言表としてたてることをそれも「括弧つきで」示唆するにとどまり、その根拠を説明しない。思うに、歴史的説話にみられる間接話法での引用文(従属節や補足節を形成する)においては、談話の端的な指標となる三つの時制(現在・単純未来・複合過去)が指呼詞とおなじく出現せず、これを談話とよぶことには難がある。もっとも、これらの時制がそれへと転換される半過去・条件法現在・大過去は談話でも容認される。他方、そこでは歴史的な言表の充足理由となるアオリストもあらわれないので、これまた歴史的説話と規定することはできない。もっとも時制の照応によって現れる大過去は「そこ」や「その時」とともに歴史的説話の道具ではある。以上の理由から言語学者はこれを第三のタイプとすることを提案したのであろう。

しかし理由が上に分析したようなものであるならば、それは必然性を欠きはしないかと問うことができる。なぜか。この間接話法の文章を組織する時制、大過去および接続法半過去は二つの言表タイプに共通の時制であるのだから、そのいずれでもあることが論理的には可能である。ところでここで談話を主張することは不可能である。理由はコンテキストにある。じっさい前後の文章は“Solon se défendit. . . , il invoqua le témoignage de la Terre Mère // il décida de quitter Athènes. . .” (ソロンは釈明した…、彼は母なるガイアの証言をもとめた//彼はアテナイを後にすることをきめた)といずれも説話の必要・十分な標であるアオリストにおかれている。さらに仮定的な推論をくわえれば、もし告発者たちのことばに「ここ」「いま」なる語があったとすればどうなるか。い

うまでもなく「そこで」「その時」となるほかはない。それも指呼詞への参照を欠いた副詞——歴史記述の標——にかわってしまう。類比のことが人称についてもいえる。可能な二人称は、一・二人称との相関関係をもたない三人称に転落するのである。どういうことか。著者みずから書いているように、談話は「事件のことばで」あるいは「事件として」(en termes d'événement) (p. 242) つたえられるのである。それは「歴史的な局面にうつしかえられる(transposé)」。つまり本質的に歴史的説話に変換されているというべきである。起源における談話は説話の枠内にうめこまれることによって説話化されるのである。

こうして我々には、この種の言表の他の二つのタイプにたいする差異は、さきに我々が観察した非時間的現在形による言表の独自性にくらべて、とるに足りぬものと思われる。それは説話に還元できるからである。さて、理論を確認するにすぎないとみえた残る二つの例外も、放任することのできない問題をふくんでいる。

談話／説話≠話しことば／書きことば

それは、「競合的にもちいられる」「相補的な」(p. 239)これらのシステムは理論的な極を構成するとしても、現実の使用においては往来や混入をみせるという事実をおしえる。間接話法もバンヴェニストにとってはすでに合体(se conjointre en)であった。彼はこの事実をみとめて、二つのタイプの対立は話しことば／書きことばのそれと同じではないとする。歴史的言表は今日ではもっぱら書きことばにぞくするが、「談話は話されるとおなじく書かれもする」(p. 242)。それゆえある種の推断、「談話＝話しことば＝新しい言語」、「説話＝書きことば＝古い言語」は正しくない。このうち後の式の第一項と第二項とのあいだの等式のみが成り立つ。(第二項と第三項との不等性はすでにみた)。

競合を説明して著者はこう書いている。

「じっさいには人は一方から他方に瞬時にうつる。歴史的説話のなかに談話が現れるときにはいつでも、たとえば歴史家がある人物の言葉を再現するとき、あるいは報告される事件に自ら介入して判断をくだす時に、人はもう一方の時制システム、談話のそれにうつる。これら瞬時の移動をゆるすのは言語活動に固有の性質である」(p. 242)。

この引用文があげる事例はふたつ。歴史家による登場人物のことばの再現はうえにみた例外①に、歴史家による事件にたいする判断は例外③に対応する。むろん例外②は、ここで単なる「移動」(transfert)以上のものをしめしていた。それは変様をとまなう移動であると我々は解釈した。

もうひとつ奇妙な遺漏がある。「一方から他方への」往来であれば、言及された事例とは逆の場合もあげられて当然であろう。談話から説話への移動、談話のなかに歴史的説話があらわれる時である。これを著者はあげない。むろん見本テキストは説話の例であり、それらのみせる例外を説明する必要はあっただろう。しかし逆の事態、歴史的説話の談話への介入はその逆の事態よりも、めったにないともいうのか。あってもスムーズになされるとでも？ この疑問にジュラル・ジュネットの仮説が由来するであろう。

しかし、我々はすでに言語学をそれて、文学理論の分野としての説話学の域に入りかかっている。ここで章をあらためるのがふさわしい。

第二章 説話学への逸脱

我々がもはや言語理論から離れつつあることに気づくためには、ジュネットの議論を検討しなければならない。じっさい詩学者は談話がいとも容易に説話をひきいれることを自明のこととしているのである。

談話と説話の混在

『ガンバラ』からの抜粋(例文C)を吟味したあと、ジュネットはこう書いている。

「説話は、談話が説話の飛び領土をむかえいれるように容易には、ジョルジュ・ブランがいみじくも「作家の介入」とよんだこれら談話の飛び領土を統合しないことは明らかである。談話のうちに挿入された説話は談話の要素に変形するが、説話に挿入された談話は談話のままとどまっていて、たやすく見分け位置をさだめ得る嚢胞のようなものを形成する。説話の純粹さは談話のそれよりもっと明白であるといえよう」(*20)。

一見して慎重な(比較級の反復、「といえよう」dirait-on)この文章にはしか

し二三の問題がある。まず①説話は談話を容易に統合 (intégrer) しないという指摘には、なるほど現在形で介入する著者の考察や直接話法での引用が証拠となる。けれども引用にはもうひとつの手法があることを我々は知っている。間接話法とはまさにこの説話による談話の統合でなくて何であろうか。もちろん例文では書記法上の標識つまり引用符がその外的な起源を画定してはいる。けれどもこれは言語でも文字でもないことを忘れてはならない。言語のレベルでは、時制といい人称といいまた指呼詞の不在といい、引用テキストはまったく説話のそれにほかならず、その転送の痕跡はあいまいである。それゆえにこそ引用符が必要であった。似たことは自由間接話法についてもいえよう。これが理論家の指摘にたいする我々のひとつの留保である。第二の留保は逆の場合にかかわる。

②「談話のうちに挿入された説話は談話の要素に変形する(se transforme)」という指摘。批評家はこのことを説明して書いている。

「談話領域のなかへの説話要素の挿入は、談話を解除するには十分ではない。なぜかといえば、説話要素はたいいてい背景に暗然に残っている話者への参照にむすびついていて、この話者はまたいつでも介入し得るのであり、しかもその再来は「闖入」として感じられはしないからである」(op. cit., p. 65)。

ジュネットは『墓の彼方からの回想』の一部(*21)を引用して、「語りはじっさい一人称での談話の秩序からではいなかったのである」と確認する。

上の説明もまた「たいいていは」(le plus souvent)なる留保をもつのだが、なによりも引用される文献に疑問がある。というのは、アオリストと複合過去の混在するシャトーブリヤンのこの『回想録』——言語学者が本質的に談話の外延のひとつにあげたジャンル——のなかのそのパラグラフは一つとしてアオリストが生起しない件であって、言語学者のいう意味での歴史的説話ではなく、事件に付帯する状況、いわゆる背景の、もちろん未完了形による記述である。ところで未完了が談話にも共通の時制であったことを思いだそう。じっさいそれはつづいてその指標(一人称、とりわけ複合過去)があらわれるところの談話による物語の一部なのである。指摘するにとどめるが、ここには説話の境界を画するもうひとつの対立、内部的な対立——語り(narration)／描写(description)——をむしろ観察すべきであったと思われる(*22)。したがって、語り手がすぐにまた直接に発言をおこなうからといって「驚いたり困惑したり」

する理由はなかった。

ところで我々は、人称よりはすぐれて時制をもって言表同定の指標としなければならぬと考える。その理由をここでのべておこう。

時制そして／または人称

それは、ジュネットのおかした不注意をあえて指摘している我々自身の方法を明確にすると同時にもうひとつの誤解をしりぞけるためである。

「フランス語動詞における時制関係」を説明しつつ、二種類の言表に共通してあらわれ得る時制の認知について、ハラルト・ヴァインリッヒは、「半過去および大過去は、もしそれが一・二人称に結ばれているならば談話の側にあり、三人称の形態素をふくむならば歴史の側にある」(*23)と解釈している。これが理論から帰結する判別の基準と思われたのである。『時制』の著者自身は上の命題を承認しないという(p. 62)。ここで我々が問うのはヴァインリッヒによるバンヴェニスト理解の是非であることを明言しておかねばならない。もし上の解釈がただしければ、シャトーブリヤンの先のテキストは、一・二人称を欠く部分については、バンヴェニストにしたがって歴史的言表ということになる。しかしそんなことはない。二つの異論がある。まず、いうも愚かだが、談話もまた三人称を自由にもちいることである。バンヴェニストも三人称について「二つの言表プランに共通の形」(p. 247)とのべている。第二に、一人称が歴史的説話でも排除されないことであって、これまた著者の認めるところである。なるほど彼は、歴史的説話を「<自叙伝的な>言語形態を排除する言表様態」と定義したあと「厳格に追求される歴史的説話においては、それゆえ<三人称>の形しかみとめられないであろう」(p. 239)と書いていたし、「歴史的説話のはつねにかかわらずアオリストを用いるのだが、そこから三人称の形しかとりあげない」(p. 244)との宣言も見える。だが著者は註記してこの命題を矯正するのである。

「この断定にはニュアンスをつける必要がある。いまでも小説家は苦もなく一人称単・複数でアオリストをもちいている。(…)しかし歴史家についてはそうはいかない」(p. 244, n. 3)。

二種の言表行為におけるその分割が不完全であるがゆえに人称は、著者にしたがって、言表判別の基準たり得ない。(ヴァインリッヒがもちいたはずの「パ

リ言語学会会報」での初出テキストにもこの注記はある) (*24)。必要にして十分な基準とは、半過去や大過去の現れる文脈——必要ならばこれは当の文章(ミクロ・コンテキスト)、環境をなす前後の文、パラグラフ、章、テキスト全体(マクロ・コンテキスト)へと拡大していくことができる——において、これと併用されるほかの時制形である。それがアオリストと結合してあらわれるならテキストは歴史的言表であり(ex. *J'étais fatiguée; je m'endormis.*)、現在形(*25)や複合過去、未来形とともになら談話である(*Il était fatigué; il s'est endormi*)。別のカテゴリーとの組み合わせにさきだって範疇内部での要素の組み合わせをまずみなければならぬ。これは独創的な指摘ではない。必要な変更をくわえれば、それが著者の表明する見解である。複合形の判別について彼は書いていた。

「判別の原理はおなじである。“*quand il a fini son travail, il rentre chez lui*”は談話である。現在形のゆえに、そしてまた現在にたいする先行性のゆえに。“*quand il eut fini. . . , il rentra*”は歴史的言表である。アオリストのゆえにまたアオリストにたいする先行性のゆえに」(p. 247)。

精密であるためにはしかし、人称も同等の判別基準になることをみおとしてはならない。ただし問題はあれこれの人称の出現ではない。孤立した形でならずすべての人称がいずれの言表においても用いられる。そうではなく発話における人称関係すなわち対をなす<Je>——<Tu>の現在/不在が基準になるのである。談話はこのコミュニケーション状況でなされる発話であり、説話にはこの条件が欠ける。そしてむろん時制の形がこれに相関する。

さてジュネット——我々はいぜんとして「説話の境界」を検討している——によるシャトブリヤンの援用はもうひとつ別種の問いをひらく契機となるのだが、これをとりあげるまえに、談話のなかへの説話の導入について一言しておくべきであろう。

談話と説話の結合

我々はここで「説話要素の」といわない。もっと大きな規模での結合を考える必要があるからである。たとえば『カルメン』は談話からはじまり、それが歴史的説話をひきこむ。談話の枠のなかに説話が位置するといってもよい。その移行の部分を参照しよう。

「私の論文がヨーロッパの全学界を宙吊りにしているこの地理学上の問題をついに解決することになるのをまちながら、私はあなた(方)に小さな物語をお話しいたしましょう」(je veux vous raconter. . .)(*26)。

人称状況(私—あなた)と時制(現在形)のゆえにこれは談話である。

そして「小さな物語」がはじまる。

「ある日のこと、カ(ル)チェナ平野の高地をうろつきながら、疲れはてて死ぬほど喉はかわき、灼熱の太陽にやかれて、カエサルのこともポムペイウスの息子らのこともよるこんで悪魔にくれてやると思っていた(je donnais au diable. . .)とき、私は見た(j'aperçus. . .)(p. 938)。

アオリストのテキストの出現である。したがって直前の未完了形は、『回想録』のそれとはことなり歴史的説話の一時制である。談話が説話を導入するにもかかわらず、それは「説話を談話の要素に変形する」ことはない。「話者」への参照の問題は別稿にゆずる。いまはこのアオリストにおかれた「私」が、話すかぎりにおける話者ではなく語られる限りににおける指示対象にすぎないこと、相関的に「あなた」はもはや不在であって人称状況が欠けていること(導入の談話言表との相違)に注意しておけば十分である(*27)。

談話域から説話への類比的な切りかえは、『カルメン』第二章(「私」の語る物語)から第三章(ドン・ホセの語る物語の「引用」)にかけて、さらには第三章の内部におけるドン・ホセの「私」への話しかけ(「私」は「あなた」となる)から自分の身の上話への移行においても見られる。これらの言説リレーにおいて説話は談話を「解除する」に十分であり、説話をそれとして「見分け位置をさだめる」ことはいともたやすい。おなじ現象はいくらでも他のテキストで観察できるだろう。この境界がもっと明確な小説群もある。物語にさきだって作者自身(もしくは編集者や批評者)の序文、紹介、前書きが、あるいは後書きがおかれている作品である。これは理論家がのちに注目するテキスト現象のひとつとなる(*28)。これらすべてが談話のなかに境界を設定したうえで説話を引用するものであって、そこにおいて談話はいささかも説話を談話化することはない。そのいみでは歴史家のテキストも例外ではないだろう。我々には、批評家はみずから設定した微視的な論証方法のために、二つの言表の分節の様態について見落としをしたのだと思われる。

しかしなぜ、バンヴェニストにしたがえば全体として談話にぞくするとしか
言いようのないテキストをジュネットは参照したのか。ある単純な遺漏——し
かし学的な言説の基盤にかかわる——を理由としてあげることができる。同時
にそれは、言語学からの逸脱と我々がよぶところの説話学に固有の展望をあき
らかにするであろう。

定義の抗争

話は前後するが、まず、詩学者のテキストで「フランス語の動詞における時
制関係」が言及をうけるところから見よう。

プラトーンやアリストテレスによる詩の定義、*poiésis*=*mimésis* は暗黙に
抒情詩、諷刺詩、教訓詩をポイエーシスから除外することになる、とジュネッ
トはいう。たとえエムベドクレースがそう呼ばれようと(*29)、サップォやピ
ンダロスを「自然学者」とよぶことはできまい。ところで、「これら『詩学』
から排除される全ての」作家に共通するものは何か。

「彼らの作品は、詩人の人格やことばに外在する現実のもしくは虚構の行
為を、説話によってあるいは上演によって模倣することにはではなく、単に詩
人が直接にその名においてのべる言説に存する」(p. 61-62)(*30)。

古代におけるこの詩／非詩の区別は、説話の「あるいは最も重要な境界」(p.
61)を画定するのかもしれない、と理論家は指摘する。おなじことがラテンの
哀傷歌についてもいえるし、散文にうつれば「すべての雄弁、道徳的あるいは
哲学的考察、科学上のもしくは科学に付随する(*para-scientifique*)報告、エッ
ッセや書簡、日記など」についてもいえるからである。「我々が文学とよんで
いるものの全体」を二分することになるからである。そしてここで言語学への参
照がくる。曰く、「この分割は最近エミル・バンヴェニストによって提起され
た説話(*récit*) (あるいは歴史 *histoire*)と談話(*discours*)との区分にほぼ対応す
る」(p. 62)。相違は、バンヴェニストのいう談話には、アリストテレスが
直接的模倣とよんでいたもの——劇や叙事詩において登場人物が発することば
——もふくまれる点である。こうして人は、古代ギリシアにおけるミュートス
／ロゴスの対立の現代言語学における説話／談話のそれとしての蘇りに我々が
立ちあっていたことを知る。

ところで、注意すべきは、バンヴェニストの術語がジュネットのテキストで

は簡単にまるで自明のことであるかのように「説話」(あるいは「歴史」)／「談話」とおきかえられている事実である。それは、言語学者のペンの下ですではじまっていたのであって、ある程度まではさげがたいことであった。「歴史的言表行為は過去の事件の説話を特徴づける」という著者の区分は基本的には言表行為のそれであった。それが換喩は言語にとって自然でありさげがたいことですらあるためか、特徴づけられるものの名が特徴づけるものをいみしてしまう。さらには前者がひとり歩きする。しかしまた著者自身にも責めがないとはいえない。一方では「歴史的説話の時制」を「物語の(narratifs)時制」と混同してはならないと、つまり彼のいう「歴史的説話」はいわゆる「物語」とおなじではないことを註記しながら(p. 242, n. 2)、俗な修辞法にこだわったのか——文体の優雅さのためにはおなじ表現の繰り返しをさげねばならない——、彼は「歴史的」なる限定をはずして「説話」を単独でもちいる。それも頻繁に。それは、読者や著者自身の誤解をまねかないかぎり許されないことではなかった。だが、二つの意味のあいだに混乱が生じてしまう。じっさい著者には、体系にとって不可能な表現をもって「全体として完了形でかかれた歴史的説話」の有無を問うことがおこる(p. 244)。名の定義は事物のそれに侵入する。おなじように「異邦人」における「説話の調子…と用いられた表現のコントラスト」を指摘するとき、この「説話」がもはや定義されてきたそれと異なることはあきらかである。歴史的言表行為が特徴づける対象としての説話と、一般に物語る行為が産出する説話とが——前者は後者の外延の部分でしかない——とりかえられたのである。もっとも著者はおなじパラグラフを「完了形の時制上の標は談話の瞬間であるのに対してアオリストのそれは事件の瞬間である」(*31)としめくくって、危うい立場をたてなおしてはいるのだが。

二つの概念のあいだでの行き来は説話学者のテキストでは絶えることがない。いや正確にいえば彼において「説話」は一般的な意味しかもたない。それゆえ彼はバンヴェニストの意味をあらわすために、各ページで注意ぶかく「厳密な形における説話」(pp. 62-63, 66-67)、「純粋状態での説話」(p. 63)、「この純粋さのレベル」(p. 64)、「説話の純粋さ」(p. 66)、「客観的物語」(p. 68)、「そのもっとも高いレベルの純粋さ」(p. 68)、「否定的な特異性」(p. 69)…とさまざまな(およそ純粋／不純の「道徳的」二元法!)限定を、これまた俗なレトリックにしたがってか、つけくわえなければならなかった。

それゆえ、批評家がバンヴェニストを要約したあと、

「このように定義された説話と談話の本質はいかなるテキストにも純粋な状態で見出されることはまずけっしてない。ほとんどいつも談話のうちにはある比率で説話が、説話のうちにはある分量で談話がはいっているからである」(p. 65)

と書くとき、指摘そのものは説話論の観点からして非の打ちどころがないとはいえ、この二文(原文はコロンがつなぐ一文)の前者から後者にかけて、説話の意味も移行の手続きなしに一方から他方へと拡大されている。章の初めにみたように、批評家が談話および説話のそれぞれにおける他方の混在の不均衡を論じる時、説話の意味はすでに言語学者のそれとはちがっていたのである。複合過去での説話(物語)が証拠として援用された所以である。また談話が説話要素を容易に談話に変形するという指摘もなされた。談話による物語行為が可能である以上、「説話要素」とはそもそも「飛び領土」ですらなかつた。

我々は形式的な手続きの欠落をあえて指摘する。概念規定が曖昧であれば、いかなる言説もその基盤において「純粋」でも強固でもありえないからである。それにここでは、デイドロのいうように「名の定義は事物の定義と異ならない」(*32)。そして最後に、集団がたずさわる学際的な言説の構築にはいささかの「交通整理」が必要になることがあると思われるからである。

しかし、このことはじつは「説話の境界」の欠点ですらないというべきかもしれない。むしろジュネットの展望そして定義が言語学のそれではなく、まして一般的な言語の慣用にとっていささか無理な命名を強いたバンヴェニストのそれではなかつた(*33)、ということである。じっさい詩学者は、文学上の説話に話題をかぎりつつこれを「現実のまたは虚構のある事件もしくは一連の事件の、言語そして特殊的には書かれた言語による再現」(*34)という「単純で自明の」ひろい常識的な定義からその論文を開始し、まさにこの自明性のもたらす不都合を打破すべく三重の対概念(ディエゲシス/ミメシス、語り/描写、説話/談話)を導入することによって説話の外的・内的な「境界」を画定していくのである。たとえさしあたって文学説話にかまけるとしても、一般説話学は対象の外延を限定すべきではなかつた。それはたとえば、文学理論を刺激してきた前衛作家のひとりミシェル・ビュートルがつとに指摘した事実——生から死にいたるまで人が説話にとりまかれていること、他人とは見られるものであるのみならず彼らの自己についての語りでもあり(*35)、また別人による語りでもあること、それは事物や場所についてもいえること、日常世界

はおよそ説話によって構成され、説話こそは「我々の現実把握の本質的な構成因のひとつである」という事実(*36)、さらに詩学者を先導した人が記述し得た事柄——

「世界の説話の数えきれないこと。それはまず様々の実体のあいだに分配されているおびただしく多様なジャンルである。あたかもいかなる物でも人がその説話をゆだね得るものであったかのごとく。説話は、言われるにせよ書かれるにせよ、分節言語によっても、固定しもしくは動く図像によっても、身振りによっても、またこれらすべての秩序ある混合によってもささえられ得る。それは神話、伝説、寓話、コント、短篇小説、叙事詩、歴史、悲劇、ドラマ、喜劇、パントマイム、絵画(…)、ステンドグラス、映画、漫画、三面記事、会話にあらわれる。そのうえ、これらほとんど無限の形をとりながら、説話はあらゆる時代、あらゆる場所、あらゆる社会に現在している。説話は人類の歴史そのものとともに始まる。説話なきいかなる民もなく、かつてあったこともない。説話は良質の、悪質の文学をあざわらう。国をこえ、歴史をこえ(transhistorique)、文化をこえて説話はそこにある。人生のように」(*37)

を視野にいれたものであった。そしてこの開かれた展望のなかで1970-1980年代の説話学が展開することはいうまでもない。

説話学における概念の再配分

ジュネットによるロゴス／ミュートスの新たな対比を観察して我々の結論としよう。

言語学の提起した歴史的説話／談話が説話学の説話／談話の対立にすりかわる時、説話の概念がかわるとすれば、それは談話の定義の変化を連座させずにはおかない。これら二項の関係の様態もおなじままではあり得ない。ところで、一方の概念の拡大膨張は他方における縮小をいみしない。かえって他方も拡大する。それはジュネットがふたつの領域における言表の混在しかたの不均衡の理由をのべるこのテキストにおいてあきらかになる。

「じっさい、談話はいかなる純粹さもまもることはない。なぜならばそれは言語活動の「自然で」、もっともひろくもっとも普遍的な様態であって、

本来あらゆる形式をこころよくむかえるものだからである。これに反して説話は特殊なマークされた様態であって、一定数の排除と制限条件(…)によって規定される様態である。談話は談話であることをやめずして「物語る」ことができるが、説話は自己自身から逸脱せずして「談話する」ことはできない」(p. 66)。

二項の関係は、もはや相互に排除しあう形での対立ではなく、一方の他方による包摂として組織される。人は話す。そして時に語る。そして話すことや語ることを書くこともある。かくして説話(あるいはむしろ物語)は談話(あるいはむしろ言説)の一つの「様態」となる。これが「説話の境界」の到達点であった。そこから詩学者は『物語の言説』(*38)の研究へとむかうことになる。

註 釈

- 1) Cf. É. Benveniste, "Civilisation : contribution à l'histoire du mot"(1954), *Problèmes de linguistique générale*, I, ch. 28, pp. 336-345 (Gallimard, 1966).
- 2) É. Benveniste, "Les relations de temps dans le verbe français"(*Bulletin de la Société de Linguistique*, LIV, 1959), *op. cit.*, chap. 19, pp. 237-250.
- 3) A. Meillet, "Sur la disparition des formes simples du prétérit"(1909), in *Linguistique historique et linguistique générale*, pp. 149-156 (Slatkine / Champion, 1982). メイエは1920年の"Remarque"(p. 156-158)において、「同じ結論にたった」という J. Gillieron, *La faillite de l'étymologie phonétique*(1919)を援用する。
- 4) 著者が il fit の形を「単純過去」とではなく「アオリスト」とよぶのは、いわゆる前過去(il eut fait)をアオリスト複合形として、つまり相関関係にある両者を統一的に把握するためである(cf. p. 245-246)。
- 5) É. Benveniste, *op. cit.*, p. 238. 原文のイタリック体はルビにかえる。
- 6) 精神世界の神秘を示唆しえた『我』と『汝』の関係(M. プーバー、1923)は、言語学による分析の対象となる。
- 7) Cf. G. W. F. Hegel, *Phénoménologie de l'esprit*, trad. fr. J. Hyppolite, T. I, p. 83-92 (Aubier, 1939).
- 8) É. Benveniste, "Structure des relations de personne dans le verbe"(1946), *op. cit.*, p. 228.
- 9) J. Dubois, M. Giacomo, L. Guespin, C. Marcellesi, J.-B. Marcellesi, J.-P. Mével, *Dictionnaire de linguistique*, <I discours>, p. 157 (Larousse, 1973).

- 10) アリストテレスを論じた同著者の「思惟の範疇と言語の範疇」(1958) (*P. L. G.*, I, pp. 63-74)その他をべつの観点から吟味したデリダの批判 (J. Derrida, "Le supplément de copule : la philosophie devant la linguistique", in *Marges de la philosophie*, とくにpp. 237-246, Minuit, 1972)参照。
- 11) R. Barthes, "Pourquoi j'aime Benveniste", I (1966) / II (1974), *Essais critiques IV : Le bruissement de la langue*, pp. 191-193 / pp. 194-196 (Seuil, 1984).
- 12) G. Glotz (et R. Cohen), *Histoire grecque* (1925), p. 225 et p. 441-442.
- 13) Balzac, *Études philosophiques : Gambara* (1837) (*La Comédie humaine*, Tome X, p. 460, La Pléiade, Gallimard, 1979).
- 14) 叙事詩における談話の介入は、サン・タマンの『救われたモーゼ』(1653)を分析する G. Genette, "D'un récit baroque", *Figures II*, surtout p. 212-217 (Seuil, 1969)に見よ。
- 15) M. Butor, "Le roman comme recherche" (1955), in *Répertoire I*, p. 8 (Minuit, 1960)。また古典的には、アリストテレス主義を表明するデュボスの文句がある。「真実が歴史の魂であるように、真実らしさが詩の魂である」(Abbé du Bos, *Réflexions critiques sur la poésie et sur la peinture* (1717), 7e éd. (1770), I, sect. 28, p. 254 (Slatkine Reprints, 1982)。
- 16) フランスでは毎年、学年度はじめの秋だけでざっと200冊の小説が出版されるという (*Le Monde*, éd. internationale, du 27 août au 2 sept. 1992, p. 11)。むろん全部が「歴史的説話」ではない。
- 17) Dante, *Banquet*, II, I, 2, *Œuvres Complètes*, trad. A. Pézard, p. 313, La Pléiade (Gallimard, 1965)。詩人はここで中世の解釈学を詩に応用しつつ、それが立てた四つの意味のうち寓意的意味のことを語っている。他にも「詩とは修辞と音楽の術によってこしらえられた虚構 (fictio=作りもの) にほかならない」という (*De l'Éloquence vulgaire*, II, IV, 2, *op. cit.*, p. 601)。
- 18) 成句 il y a (A, l. 4)の"y"は考慮する必要はない。
- 19) R. Barthes, art. cité., I, p. 192.
- 20) G. Genette, "Frontières du récit", in *Figures II*, p. 66 (Seuil, 1969)。
- 21) "Lorsque la mer était haute et qu'il y avait tempête, la vague, fouettée au pied du château, du côté de la grande grève, jaillissait jusqu'aux grandes tours. A vingt pieds d'élévation au-dessus de la base d'une de ces tours, régnait un parapet en granit, étroit, glissant, incliné, par lequel on communiquait au ravelin qui défendait le fossé : il s'agissait de saisir l'insistant entre deux vagues, de franchir l'endroit périlleux avant que le flot se brisât et couvrît la tour..." (これが詩学者の同定しようとするテキスト。数行の省略がくろが、そこには承前詞の"vous" (onの代用)がでている。時制はいぜんとして半過去。そして)、

- “Pas un de nous ne se refusait à l'aventure, mais j'ai vu des enfants pâlir avant de la tenter.”
 (Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, pub. 1848-1850, L. I, ch. 5, Tome I, p. 35, La Pléiade, Gallimard, 1951. 斜字体はジュネット)。
- 22) Cf. G. Genette, *op. cit.*, pp.56-61 et Philippe Hamon, *Introduction à l'analyse du descriptif* (Hachette, 1981).
- 23) H. Weinrich, *Le temps*(1964), trad. fr. par M. Lacoste, p. 61 (Seuil, 1973). 奇妙にも1ページ半におよぼほとんど同語反復のテキストが同書 pp. 261-262にもみえる。
- 24) Voir le *Bulletin*. . . , *op. cit.* (*supra*, n. 2), LIV, 1959, fasc. 1, p. 76.
- 25) いわゆる「歴史的現在」は除外する。もちろんそれをそれとして認定する基準もまた前後におかれた時制であることにはかわりはない。
- 26) Mérimée, *Carmen*, in *Théâtre de Clara Gazul, Romans et Nouvelles*, p. 937-938, La Pléiade (Gallimard, 1978). ルビおよびイタリック筆者。
- 27) 詳細については拙論「『カルメン』はどのように作られているか：脱神話のための試論」(1)、特に13-30頁(山口大学「独仏文学」第12号、1990)を参照されたい。
- 28) Voir G. Genette, *Seuils* (Seuil, 1987). 類似の現象を考察した拙論「『パンセ』とメタテキスト——未完成エクリチュールの徴候についての試論」(1)(2)(3)(山口大学「独仏文学」第七号、1985、山口大学「文学会志」第三十六巻、1985、「独仏文学」第八号、1986)参照。
- 29) Aristote, *la Poétique*, 1447 b 19.
- 30) ここでの“la personne (du poète)”は文法的人称をいみしないように思われる。
- 31) しかしこのテキストにおける“temporel”は「時制上の」なのか「時間上の」なのか。フランス語はその分析性を欠く。同じ不明晰は“personne”(人?人称?)にもあり得る。
- 32) Diderot, art. “*Encyclopédie*” dans l'*Encyclopédie*, V(1755), 635 A; *Œuvres Complètes*, T. VII, p. 177 (Hermann, 1976).
- 33) 古典論理学の勧め: 「ある語を定義しなければならない時には、可能なかぎり慣用に順応しなければならない。語に、それがもっている意味にかけ離れた意味を与えないことである」(Arnauld et Nicole, *La Logique ou l'art de penser*, 5e éd. (1683), I, ch. 13, p. 112, Faculté des Lettres de Lille, 1964).
- 34) G. Genette, *op. cit.*, p. 49. 古典的な定義と比較しよう。「なぜなら私は、なされた事ごと(pragmatôn)の構成(sunthesis)を物語(muthos)とよぶのだから」(Aristote, *op. cit.*, 50 a 4-5).
- 35) Cf. Heidegger: “Je suis ce que je dis”, cité par Weinrich, *op. cit.*, p. 101.
- 36) M. Butor, <Le roman comme recherche>, *op. cit.*, p. 7.

- 37) R. Barthes, "Introduction à l'analyse structurale des récits"(1966), in *L'Aventure sémiologique*, p. 167 (Seuil, 1985).
- 38) G. Genette, "Discours du récit", in *Figures III* (Seuil, 1972) et *Nouveau discours du récit* (Seuil, 1983).